「ボランティア（参加）の力」

社会福祉法人金沢市社会福祉協議会
金沢ボランティアセンター所長
宮　下　吉　広

１．参加の力の素晴らしさ①

（１）参加の力が発揮される多彩な取り組み

①PTAをPTOに改組

「やらないといけない」（義務感）

「やらされている」（強制感）

「やらない人がいる」（不公平感）

3本の矢

↓

「できる人が、できる時に、できることをやる！」

PTO（保護者と先生による楽しむ学校応援団）

１．参加の力の素晴らしさ②

（1）参加の力が発揮される多彩な取り組み

②まちライブラリー（全国に約５００カ所）

思いを託した本を介してのコミュニティづくり

「場所を作って呼び掛けて、本を持ち寄る」

→「持ち寄った本に寄贈者情報やメッセージを記入」

→「読んだ人は、感想を連ねていく」

→「本がきっかけとなり話ができ、その場に独自の本棚（まちライブラリー）ができる」

→「まちライブラリーが増え、まちがおもしろくなる」

1．参加の力の素晴らしさ③

（1）参加の力が発揮される多彩な取り組み

③Wikipedia（ウィキペディア）

　世界中のボランティアの共同作業によって執筆されるオンライン市民参加型多言語百科事典。

　ウィキペディア財団が主に寄付によって運営しており書き込みにあたって資格は問われず誰で修正が可能。

↓

　匿名での執筆や修正となるので名誉心が満たされる訳ではない。正しい情報を共有したいという人々の思いが、膨大な知（約3,900万件）の体系を支えている。

１．参加の力の素晴らしさ④

（1）参加の力が発揮される多彩な取り組み

④高槻ジャズストリート

1,000人以上の市民が支えるジャズの祭典。

全国から集まった約800組の演奏家が小学校グラウンドや高架下等約70ケ所で音楽を奏でる。

原則、演奏家は無報酬。演奏を聴いた観客の拍手とカンパが報酬。

運営資金約3千万円は独自Tシャツや会場での飲食売り上げ、パンフレットの広告費、協賛金、寄付金で賄われている。

１．参加の力の素晴らしさ⑤

（1）参加の力が発揮される多彩な取り組み

⑤クラウドファンディングで資金確保

映画「この世界の片隅に」は3,374人から寄せられた3,912万円余りの寄付によって、映画製作の出資企業募集のための試験的な短い映像作成費用が賄われ、映画製作が決まった。

この試験映像を見た人達が「『この世界の片隅に』を支援する呉・広島の会」を発足し、情報交換やPRを進めていった。

この会が、クラウドファンディングの起点となった。

１．参加の力の素晴らしさ⑥

　これらの活動は、いずれも自らの共感や好奇心などがエネルギー源に進んでいる。

　時に身銭を切ってでもこうしたボランティア活動に参加して楽しむ人はたくさんいます。

↓

　ボランティア活動は自発的活動の象徴。

　ボランティア活動に参加することには、様々な魅力や可能性がある。

２．ボランティア活動を定義づける要素

（１）やる気（自発性）

自分の意志と判断で自発的に行う

（２）世直し（社会性、公益性）

他者や社会の利益を追求する

（３）手弁当（無償性）

自分のために金銭的、物理的利益を求めない

（４）連帯性の原則（連帯性）

誰もが暮らしやすい社会を目指していろいろな人とつながって、社会の課題解決に取組む

３.「ボランティア」と聞くとどんなイメージを持ちますか

奉仕／無償／慈善／善意／偽善／自己犠牲／自己満足／充実感／思いやり／助け合い／福祉／いいこと／時間のある人がやること／公共的活動／継続してやること／見返りを求めない／何かを改善する活動／半ば強制的にやらされる活動

⇒どちらかというと、窮屈で高尚でたいへんな事、ハードルが高い、特別なことをすると思われがち。

４.「ボランティア」の語源

ボランティアは英語で「volunteer」。

語幹の「vol」の共通点

「volcano」: 火山、「volleyball」: バレーボール、

「volley」: ボレー（テニスの）

共通するのは、噴き上がる、浮き上げるという意味。

→内面から湧いてくる意欲から行動を始める。

意欲の源泉は、

被災地で復興に努力する人々への共感、

あってはならないという事態への怒り、

価値観を共有できる仲間と出会える楽しさ、

活動する中で自分の能力が活かせた充実感　など

５．「ボランティア」は我慢が出来なくて始めるもの

本来、ボランティア活動は、自分の周りの放っておけないことへの強い思い、自分を活かせる場を得たいという欲求、興味や関心のある事への好奇心、ちょっと誘われて、順番が回ってきて・・など、きっかけや思いの強さは様々でも、自分発（自分が選んで行う）の活動。

周到に計画し、その遂行をノルマとして自分に課す活動ではなく、活動を通じて得た感動や怒り、充実感などが重なり合って進んでいく活動。

6.「ボランティア」の基本は自主・自律

自分が決める、自分で決めるという「自主・自律」の活動。他人に頼まれたり誘われたりしなくても、自ら活動を始める。頼まれても自分自身が納得しない限り活動しない。

ボランティア活動は他人の意見に支配されずに自由に取り組めるもので、活動に伴う負担を引き受けるなら、公序良俗に違反しない限り、何をしても良い。

自らの意思で取り組んだ結果の責任は自分自身が負うことになるが、一人だけで背負いこむことはない。職場や地域、年齢や立場、障害の有無や国籍の違いを超えて夢や願いを共有する仲間と出会える活動でもある。

7．日々の暮らしの中にある ボランティア活動①

（1）選ぶことから始まる活動

取り組む内容や対象者、活動の頻度などを自ら選ぶ。そこからがスタート。公平である必要はない。

ボランティア活動ができる領域は、福祉活動だけでなく、環境や海外協力、スポーツ指導、文化活動等多岐に渡る。

インターネット等で情報供給過多となりがちな昨今は、「いろいろありすぎて、何をすればよいかわからない」という相談者が多い。自分の趣味や嗜好など好きな事から始める方が、意欲を持ちやすい。

７．日々の暮らしの中にある
ボランティア活動②

（２）普段の暮らしを「開く」

個人や一族が趣味として集めた美術品

→市民に公開すれば、「私設美術館」

企業が所有するグラウンド

→地域住民に開放すれば、「企業の社会貢献」

自分の子ども達と定期的にハイキングに行く

→近所の子ども達も誘えば、「子ども会活動」

自分は、歌や楽器演奏が好きでいつも練習している

→福祉施設で披露すれば「ボランティア活動」

7.日々の暮らしの中にあるボランティア活動③

（3）活動から生み出される利益

私益：特定の個人や組織の利益

共益：仲間や構成員に共通の利益

公益：①社会全体の利益（活動主体が行政）

②不特定かつ多数の利益（活動主体が民間）

私益や共益が、公益を生み出す活動につながる

骨髄バンクの設立、日本バリアフリーダイビング協会、「きけ、わだつみの声」の出版、八百八橋の架設工事など

8.無償の意味と多様な活動①

（1）ボランティア＝タダ働き？

戦後～1980年代までのボランティア活動と社会政策

社会問題の解決は行政が一元的に責任を負う

個々人や私企業は市生活優先ないし経済優先

コミュニティ・ケアという考え方の台頭

日本型社会福祉論の台頭

→同居という我が国の「福祉における含み資産」とも言うべき制度を生かす、という発想

家庭のあり方、とりわけ“家庭長”である女性の意識や行動に大いに依存していた

“日本的美風”の名の下、女性を家族介護の担い手とすることで、公的福祉の拡大を抑制しようとした

８．無償の意味と多様な活動②

（２）無償の取り組みの積極的な意味

①仲間・同志の関係を保ちやすい

親友の苦境を救うために奔走する時、望むのは対価ではなく、親友が苦境から脱して良い状態となる姿

相手の喜びが自分の喜びにもなる“共にある”関係

②報酬でなく共感でつながり合える

夢や目標、ビジョンを共有している

共通の関心や問題意識を持っている

お互いの個性を信頼したり、尊敬している

金銭的報酬でなく共感でつながっていることは、活動が経済的に苦境になっても踏ん張れる土台となる。

８．無償の意味と多様な活動③

（２）無償の取り組みの積極的な意味

③金銭的尺度での評価を避けられる

　金銭的な報酬(対価)を提供されると対価に応じた成果を期待されたり、同等の対価を得る他者との間で成果や能力を比較される

④共感性の高い発信力や調整力が生まれる

　他者や社会全体の利益を思って取り組まれる無償の行為と受け止められ強いインパクトを生み、ボランティアの参加や寄付者の拡大を促すことが期待できる

　身銭を切って努力することで、難しい交渉の妥協点を見出す調整力が発揮される

９．「有償ボランティア」をめぐる議論①

（１）有償ボランティア是非論争

支援を受ける人にそれなりの経済力があるケースの増

無償の援助に「恩恵的」「慈善的」イメージを感じる

多少なりとも支払った方が気楽

活動の資金確保のために一定額の経費負担を求める

助け合いの理念に共感し、“ボランティア精神”でやっているのだから適切な表現

↓　↑

有償サービスの意義は認めるが、それをボランティアと呼ぶことには反対だ

↓

「住民参加型在宅福祉サービス」という呼称が生まれた

９.「有償ボランティア」をめぐる議論②

（２）多用される有償ボランティア

①依頼する側にとって便利な用語

実態はアルバイトと変わらなくても、ボランティアという言葉の響きに自発性（能動的）が連想され、活動に対して共感度の高い人達が集まりやすい

②活動する側にとってのメリット

お小遣い的とはいえ謝礼を得ることが出来る

賃金のために働くイメージが伴うアルバイトよりも社会的に評価されているように感じる

９.「有償ボランティア」をめぐる議論③

（３）「有償」と「無償」の境界は？

Ａ：交通費等の活動に伴う実費も含め、すべて自己負担

＜↑①完全な手弁当＞

Ｂ：交通費等の実費は受け取るが、食費など活動しなくても生じる必要経費は自己負担

Ｃ：活動中の食費は外食となり出費がかさむので、活動先に出してもらう

＜↑②実費弁償の範囲での経費保障＞

Ｄ：お歳暮の品や施設の自主製品等を感謝の気持ちとして受け取る

Ｅ：活動時に提供された被服等を記念品としてもらう

９.「有償ボランティア」をめぐる議論④

（３）「有償」と「無償」の境界は？

＜↓③活動量に応じた報酬の授受＞

Ｆ：交通費等の実費弁償費に加えて、最低賃金よりも低い対価(謝礼)を受け取る

Ｇ：特殊な技能などを、最低賃金を上回るが「相場より低い」謝礼で提供する

＜↓④一般の労働＞

Ｈ：相場に応じた報酬を受け取る

ＦやＧの形態の活動は、「有償ボランティア」と言える

９.「有償ボランティア」をめぐる議論⑤

（４）システム化するほど「労働」に近づく有償ボランティア

活動がシステム化されるほど、ボランティア活動者が労働者に近づく。

有償ボランティアの約2割がケガや事故などの危険を感じると答えている。

労働者とみなすかどうかのポイントは、使用者の指示に対して諾否の自由があるか、自らの判断で代替者や補助者を使えるか、 など

いつでも休めたり、活動内容を選べるなど、ボランティアならではの自由な活動が保障されていれば、労働者とはみなされない。

１０．ＮＰＯ（非営利組織）と市民活動の関係①

（１）ＮＰＯ

Not-for-profit、Not-for-mission、organization

（利益）　　（使命）　（組織）

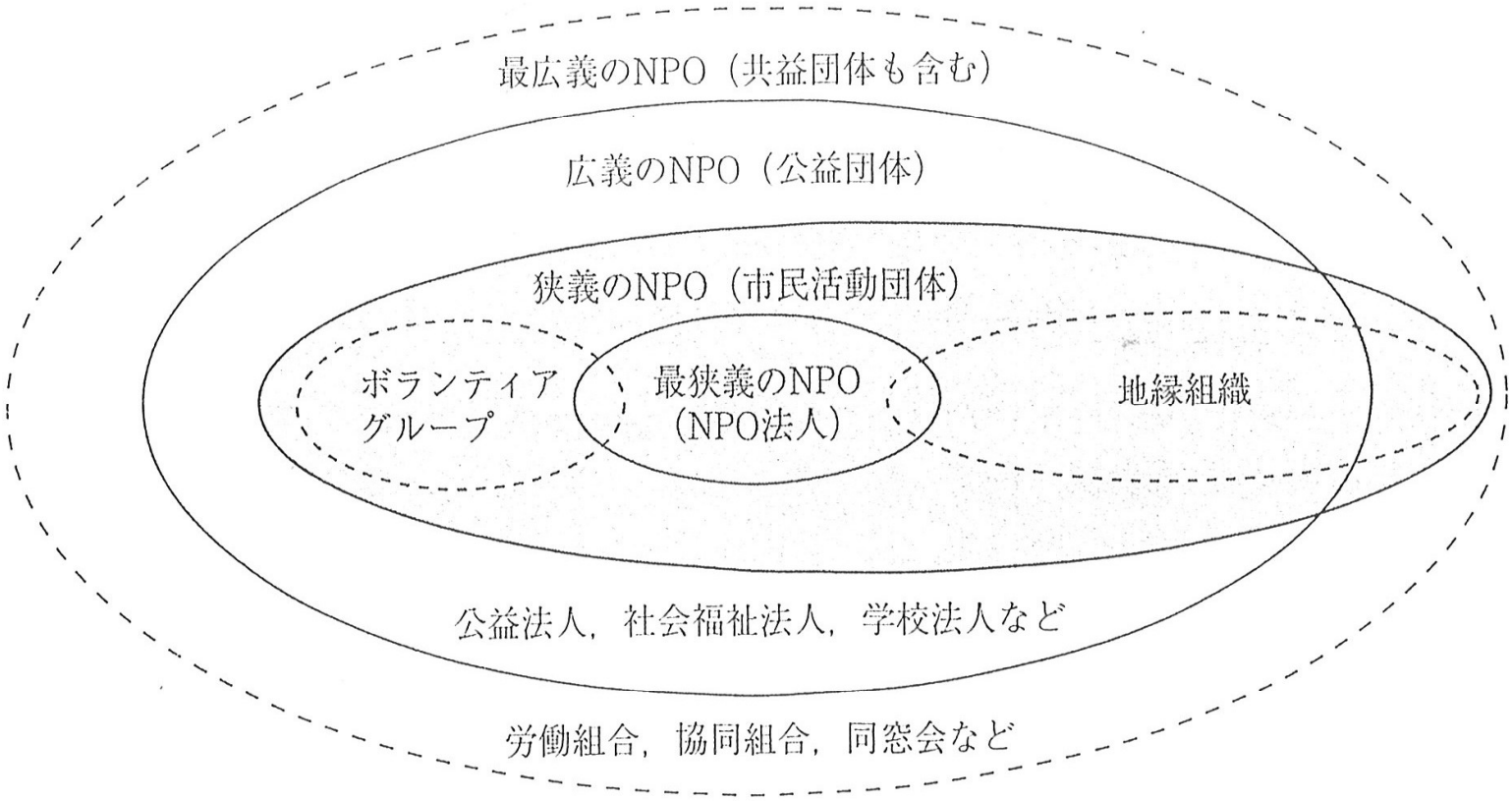
「利益拡大のためでなく（非営利）、社会的使命（mission）実現のために活動する組織」

（２）市民活動

有償、無償の違いにこだわらず、市民として社会問題を解決するために進められる活動

10. NPO（非営利組織）と市民活動の関係②

図4-2　NPOの多様な定義の関係



１１．時間預託制度などの取り組み①

（１）時間預託制度

　ボランティア活動の実績を時間単位で「預託」し、自身や家族がボランティアの援助を受けたい時に引き出す（預託した時間に応じて応援を求める）仕組み。

　活動の実績によって、将来、活動者自身がサービスを受けやすくなるよう対価的な効果を得られる仕組みにより、活動に参加するハードルを低くしようとする取り組み。

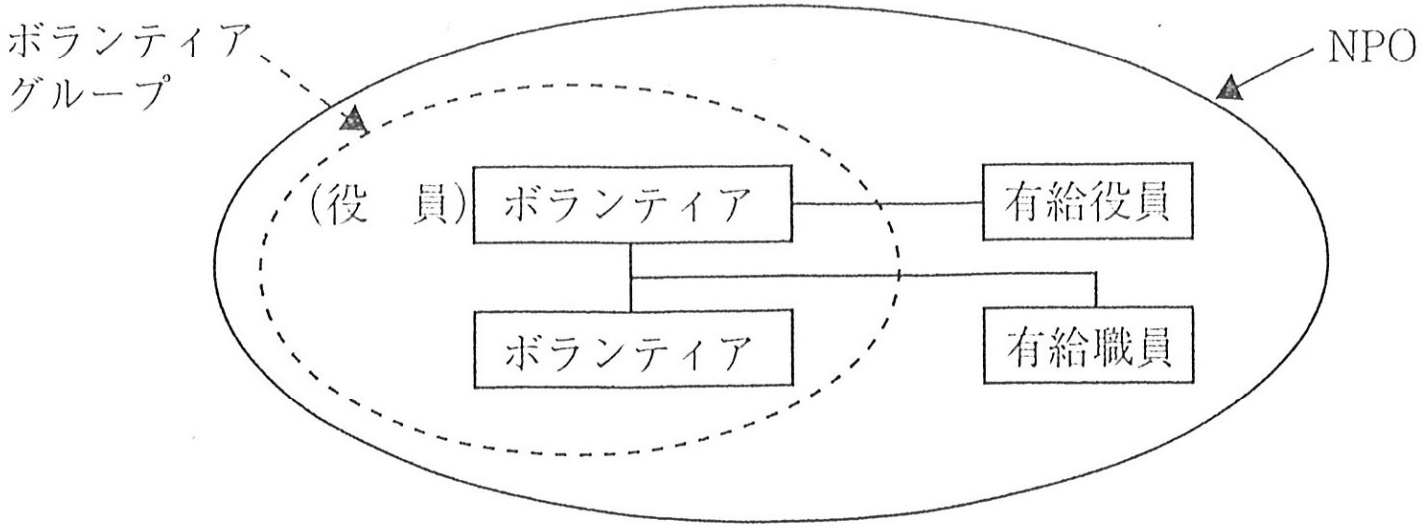
１１．時間預託制度などの取り組み②

（２）地域通貨制度

　地域通貨は、互いに助けられ、支え合うサービスや行為を時間や点数、紙幣などに置き換えこれを「通貨」として財やサービスと交換するシステムで、地域の人々が知恵や汗や才能を出し合って、市場経済とは全く別の新しい価値観を形成し、地域で自分たち独自の通貨を循環させながら、コミュニティの再構築、支え合いの地域づくりをしていこうというもの。

12. 営利を目的としない姿勢の象徴
ボランティアの参画①

図4-3　ボランティアグループとNPOの関係



１２．営利を目的としない姿勢の象徴
ボランティアの参画②

「何とかしたい」とNPOを立ち上げる人は、ボランティア。そのボランティアがグループを作るとボランティアグループになる。

メンバーが全員無給では余暇活動の域を超えることは難しい。

安定的で専門性を持った活動をするために専従の有給職員を雇うと、ボランティアだけで構成していないのでボランティアグループとは呼べないが、NPOではある。

１３.「交換条件付き報酬」が意欲を下げる

（1）内的動機付けを損ない成果があがらなくなる。

「お礼をするから〇〇をしてほしい」と金銭的報酬で外から意欲付けようとすると、自らの内から湧いていた意欲が萎えてしまう。

（2）好ましい行動への意欲を失わせる。

望ましくない行為を抑制しようと罰金を課すと罰金がなかった時には迷惑をかける相手をおもんばかってなされていた行動が、「罰金を払うのだからよいだろう」という発想が生まれる。

１４.「自発」の取り組みゆえの強み
市民と行政の取り組みの違い①

◎ボランティア活動、市民活動とは

「自分の好きな、心が動くテーマに関わることから、社会につながり、社会を良くしていく機会を得る。自発的に自身の内側から湧いてくる共感や好奇心や怒りなど思いを起点に自身の関心や問題意識、能力を活かして活動が進む」もの。

１４.「自発」の取り組みゆえの強み
市民と行政の取り組みの違い②

（1）多彩な取り組みが生まれる

自らの創意で、それぞれが気づく課題に、それぞれが得意な方法で取り組むことができる。災害時の災害ボランティアセンターの活動など。

↕

行政は全体の奉仕者であり、全体を把握したうえで、最大公約数的なサービスを公平に提供する。最大公約数的なサービスとは、人権の保障という人々の生活の土台を支えるもの。

１４.「自発」の取り組みゆえの強み
市民と行政の取り組みの違い③

（2）個々に応じた温かい対応ができる

　自分の興味関心、問題意識が起点なので公平である必要がない。「他ならぬ、あなたのために」という関わりは、公平ではないが温かみを感じさせる対応となる。

14.「自発」の取り組みゆえの強み
市民と行政の取り組みの違い③

（3）先駆的・開発的・創造的な取組みに挑戦できる

　自分の興味関心、問題意識が起点の、自発的活動は原則的に自己責任で行動することになるので、未知の取り組みや開拓的な方法に挑戦することができる。

↕

　議会のなどでの協議を経て得られた全体の合意のもとで実行され、結果に対する責任も全体で負う仕組みなので、実行に当たっては慎重な検討や調整が求められる。過去の受益者との公平性を保つという理論から前例踏襲になりがち。新たな取組みを実行するにはハードルが高い。

14.「自発」の取り組みゆえの強み
市民と行政の取り組みの違い④

（4）機動的な対応も容易にできる

　自分なりに気づき、自らの責任で行動する意志さえあれば、どの場所でどのような課題に、どんなペースでどの程度関わるかは、すべて自由。「全体」の状況把握ができていなくても、ともかく目の前の課題に機動的に取り組んでいくことが可能となり、機動性を発揮できる。

↕

　議会のなどでの協議を経て得られた全体の合意のもとで実行され、結果に対する責任も全体で負う仕組みなので、実行に当たっては慎重な検討や調整が求められる。

14.「自発」の取り組みゆえの強み
市民と行政の取り組みの違い⑤

（5）アクシデントを乗り越える自発的姿勢

　自発的に活動するとは、主体的に自ら進んで役割や責任を引き受けること。最初は軽い気持ちから始めた活動が、活動を通じて応援する相手の状況が他人事とは思えなくなってきたり、活動の成果が蓄積されて自負心が高まってきたりすると、強い責任感の下で活動が進められていくことが多い。

　スポーツ大会やお祭りなど大きなイベントの運営ボランティアは、次々と起こる想定を超えたハプニングに積極的に（その状況から逃げずに）対応している方が多い。

１５.「市民の参加」ならではの意味
当事者意識を広げ市民の自治力を高める①

（1）民間ならではの良さは企業も同じ

営利企業

顧客のニーズを把握し様々な商品を開発したりサービスを提供し続けている。常連客やお得意様への特別待遇は、温かさである。

非営利団体

市民活動やNPOの活動が活性化されることにより、子ども食堂、フードバンク、学習支援、認知症カフェ、居場所づくり等、これまで置き去りにされがちだった人達にも様々なサポートが提供されるようになった。

１５.「市民の参加」ならではの意味
当事者意識を広げ市民の自治力を高める②

（2）当事者意識を高め解決の担い手になる

「当事者」とは、日々の暮らしの中で様々な生きにくさを抱えている人達自身。その反対語は「第三者」。

市民活動に参加することで、当事者でない人が当事者が抱える問題に気づき、それを我が事として捉え「当事者」となり、問題を解決する仲間、問題解決を推進する立場になる。問題解決を図ろうとする過程で同様の努力を重ねる行政や他の市民団体などとも連携を深め、自治の主体として問題解決の担い手となることができる。その努力の過程で一定の成果があがれば、その人達の意欲も高まる。

16. 自殺対策に見る当事者自身の参画の意味①

（1）当事者自身が市民活動やNPOの活動に参加する意味

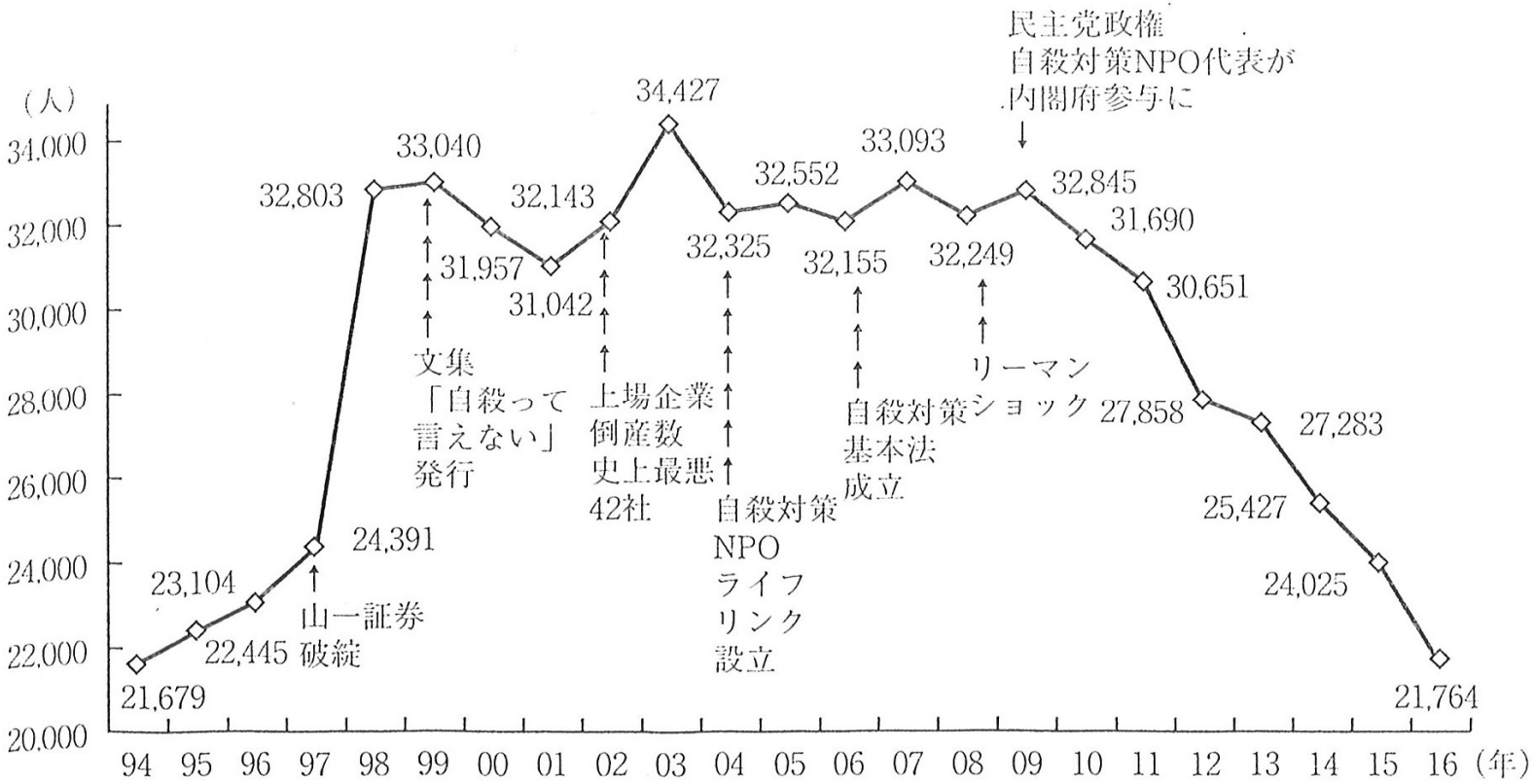
　自殺者自身がいないため自殺問題の当事者は遺族であるが、忌避されやすい死であり、遺族自身が自らを責めることも多く、遺族自らが問題解決に立ち上がることは稀であり、社会の中では埋没していた。

　交通遺児に奨学金を支給していたあしなが育英会が、自殺遺児支援のための街頭募金を実施した際、２人の遺児が自らの体験を公開の場で発表した。その後も、遺族の手記集発行や遺族も登壇したシンポジウムなどを実施した。

　この過程に参加する中で、学生の間に「親を自殺で失ったことは、自分が引き受けないといけない社会問題だ」という意識が芽生えた。

16. 自殺対策に見る当事者自身の参画の意味②

図5-1 自殺者数の推移



出所：警察庁「平成28年中における自殺の状況」。

１７.「強み」が「弱み」に　自発的社会活動の弱点①

（1）客観的評価の基準を定めるのが

　自治体ならば住民全体の合意、企業ならば利益の額が評価の基準であるが、ボランティア活動などの民間非営利活動は活動の多様性に意味があり、何を目標に、どのようなことに価値があると意味づけるかは本人ないしメンバーが自由に決めることができるので、客観的にその妥当性を判定するのは困難である。

①善意が効果を生む保証はない

　ボランティア活動は、相手が無償の応援を受ける立場にあるため、多少不満があっても我慢している場合が多い。

１７.「強み」が「弱み」に　自発的社会活動の弱点②

②善行と考えて行動することの落とし穴

「正しいからする」という姿勢は、自らの発想や方法論を絶対視して、それとは違う動きや考え方を排除する危険性がある。周囲の理解を得ない自負やこだわりは、独りよがりになる。

③自己満足

自発的活動なので「ここまですればよい」という普遍的な基準がないだけに、善行意識への安住は、活動の自己満足化につながる。

１７.「強み」が「弱み」に　自発的社会活動の弱点③

④自発性は揮発性

「熱しやすく冷めやすい」という言葉があるように、新たな出会いや気づき、体験などの何らかの刺激なしに、同じ気持ちを持ち続けることは容易ではない。特に活動がマンネリ状態だと、この意欲の低下が進みやすくなる。

↓

「これでいいんだろうか？」と活動を振り返る機会を意識して設けることが大切。

18. 自発性パラドックス①

自発的な取組みを進める中で、「自らの意思で進めた行動の結果として、自分自身が苦しい立場に立たされる。」ことが起こることがある。

自発的な取組みは「ここまですればよい」という普遍的な　基準はないだけに、どこまで取り組むかを自分自身や仲　間に問いかけながら、活動を進めることが大切。

相手の辛さに気づき見て見ぬ振りができない人や責任感が強い人ほどなりやすい傾向がある。

１８．自発性パラドックス②

（1）世界の平和・家庭の不和

　ボランティア活動や市民活動を進める上で、大変なのは家族との関係。活動に頑張るあまり家の用事や家族と関わる時間が圧縮され、小言が絶えない。

「自分のこともできないくせに・・・・」

「誰があなたの世話をしていると思ってるの！」

「たまに、家のボランティアでもしたらどうなの？」

⇕

　他に頼るところがない依頼者の姿を見て、「もっと頑張らなければ！」と思い直す。

18. 自発性パラドックス③

(1) 自発性パラドックスの克服策

①現状と今後に対する認識を変え目標を立て直す

当初の目標達成はあきらめて、現実を受け入れる。理想と現実のギャップの大きさが悩みの原因なので、想いよりも現実に合わせる。

出来たことを一つ一つ確認し、積み上げていく。

②新たな発想で活動を展開する

「過疎を逆手に取る会」は、過疎が止められない現状を受入れ、「ない」ということは「なんでもやれる可能性があるまち」と発想を変えた。

18. 自発性パラドックス④

（1）自発性パラドックスの克服策

③現状を改革し制度整備などの運動を進める

社会的な背景と結びつく問題を私的な努力だけで解決するには限界がある。地域の課題に丁寧に対応する一方で、新たな社会制度の創設を求めて行政に政策提言していく。

④支援者を確保する

社会制度の創造や改善は重要だが、全ての問題を制度の充実で解決できるわけではない。問題の解決を自分達だけで抱え込まず、周囲に仲間を広げ支援者を得て自らの体制を強化することで、誰かが孤軍奮闘することがないようにする。

１９．最後に

多くの人が、「NPO（市民活動）の目的は、社会問題の解決にある」と言う。しかし、それは、間違いだ。

「NPOの目的は、社会課題を解決する人々の創造」にある。（市民活動を支える制度をつくる会　松原明）

人々が市民活動に参加することは、問題が起こる際に被害者意識ばかりが広がる無気力な社会から、自分の力で問題を解決していこうという能動的・自治的な社会に変えていく起点となる可能性を開くものである。